

オホーツクの地まきホタテガイ漁場では、今年も海明け後から始まった残ざらい（稚貝の放流前にヒトデ等の害敵を駆除したり、取り残しの貝を漁獲する作業）と種苗放流が終盤を迎えようとしています。いまだに気温の低い日が続いています。

網走地方气象台が発表した「長期間の低温と日照不足に関する気象情報第2号」によると、4月16日～5月8日までの平均気温は「かなり低く(平年差-2.2～-2.8℃)」、日照時間も「少ない(平年比約50%)」状態となっています。このような天候が漁場の環境、さらにはホタテガイの生残や成長にどのような影響を及ぼすか、今後、注意深くみていく必要があります。

ホタテガイ漁業は本道水産業にとって重要な漁業であり、とりわけオホーツク沿岸では、地域経済を支える重要な産業となっています。しかし、今年のような春先の低温だけでなく、大時化や年毎、季節毎の漁場環境の変動に起因するへい死や採苗不振、貝の小型化・貝柱の成長不良、ヒトデ増加による減耗、さらには、年毎に変動する貝毒の発生や噴火湾におけるヨーロッパザラボヤの大量付着などの問題を抱えており、その生産は決して安定しているとは言えません。一方、5月13日には道漁連を始め関係者のご努力により、北海道のホタテガイ漁業は輸出促進に大きな武器となる「MSC 認証(海のエコラベル)」を取得しましたが、安定生産の持続には、さらなる輸出体制の整備や国内外での新たな市場開拓などによる消費拡大が求められています。

道総研水産研究本部では、このような本道のホタテガイ漁業を取り巻く現状と問題・課題を踏まえ、今後5～10年間を見据えた「ホタテガイ研究の展開方向」を策定しています(別添参照)。

網走水試ではこの展開方向に沿って、オホーツクおよび根室海峡でのホタテガイの成長などに係るモニタリング調査、外海での採苗安定化に向けたホタテガイ浮遊幼生の自動解析技術の開発を実施しています。また、地まきホタテ漁場を適正に管理するため、漁場海底のビデオ画像を利用してホタテガイの資源量を高精度で推定する技術の開発やホタテガイの外敵生物であるヒトデの効果的な駆除手法の確立に向け、超音波を利用した遠隔測定によりヒトデの移動を把握する研究に取り組んでいます。さらにホタテガイの生産安定に関しては、貝毒プランクトンのモニタリング調査や対EU輸出に向けたプランクトン検査を継続するとともに、重要な輸出品である乾貝柱製品の品質向上・安定化に関する試験や冷凍貝柱の高品質化に関する基礎的な研究を進めています。

これらのモニタリング調査の結果や技術開発の成果は、逐次、漁業者の皆さんや漁協など関係機関にお知らせしますので、是非ご活用ください。